

# 県外派遣報告書

報告者 川井 剛

- 1 大会名 第46回全九州中学生バスケットボール春季選手権大会
- 2 期日 令和8年2月27日(金)～3月1日(日)
- 3 会場 クラサス武道スポーツセンター
- 4 担当試合 Game① 28日(土) 男子1回戦 RIGARE—長崎ヴェルカ U15 CC  
Game② 28日(土) 男子2回戦 熊本 DREAMS—長崎ヴェルカ U15 CC  
Game③ 1日(日) 女子決勝 折尾—三股 CC

## 5 振り返り

**【Game①】** ○チーム情報の共有（パンフレットや各県大会の情報をもとに）

○ベーシックなメカニクスの確認と、クルーワークの確認

○アングルの確認とプライマリーの確認

終始競り合う展開のゲームだったが、クルーがそれぞれのプライマリーで的確なコールを積み重ねてくださりスムーズな運営となった。両チームとも、エースプレイヤーをどう抑えるかという守り方が出てきたときに、イリーガルなものに対して早めの対応をすることができた。白チームの方が、コーチ・選手共にコミュニケーションを求めてくるケースが多かった。丁寧に対応したが、青チームはそのような言動がなかったので、【公平】という面では課題が残った。

**【Game②】** ○チーム情報の共有。（キープレイヤー、プレス対応）

○気になったことは何でも話しましょうというクルーワーク

○リバウンドが鍵なので、リバウンドカバー、プライマリーの確認

終始競り合う展開のゲームの中で、クルーで気づきを共有し合い、共通認識をもってゲームを運営することができた。コンタクトの多いゲームだったが、実際の被害が出るまでペイシメントで我慢しながら、見極めてコールをすることがクルーとして実践できた。最後までどちらが勝つかわからない1点差のゲームだったが、クルーとして慌てることなく、落ち着いて最後までゲームを運営することができた。

**【Game③】** ○白のビッグマンに対する赤の守り方

○両チームの特徴から考えられる必要なメカニクス（プレス対応）

プレカンで打ち合わせた通り、ビッグマンに対する守り方の部分でクルーとしてコールをしていくことができ、スムーズにゲーム運営を進めることができたと思っていたが、映像の振り返りや試合後のミーティングで、自分の感じ方と違って部分が明らかになった。

具体的な場面として2Qが悔やまれた。2Qに入り、流れが悪かった赤が早い段階でタイムアウトをとり、流れを引き戻そうとする展開の中で、白のビッグマンに立て続けにやられる展開となった。2回連続で赤のAOSでのファウルが起き、点差が離れて行った。その中で、白のビッグマンが赤の選手を両手で押してスペースを作り、そのままバスケットカウントとなる現象が起こった。リードからは、ボールサイドから

大きくセンターサイドの裏パスが飛んだ状況で、目を当てた瞬間に両手で押したシーンが見えた状況だった。大きなインパクトでなかったことや情報が少なかったことでコールをすることができなかったが、映像の振り返りの中では、このケースが一番大きなターニングポイントだったと感じた。『オフenseファウルをコールするべきだった』と感じている。

では、このケースを【オフenseファウル】と判定するためには、どんな準備が必要なのかを分析してみた。まずは、メカニクスの面ではリードとしてボールサイドにいても、キーププレイヤーであるビッグマンがどこにいるのかをもっと把握することができると感じた。センターサイドではあるが、ペイントに侵入しようとするプレイヤーの把握ができていれば、コールの準備ができたと思う。次に、ゲームフローを感じることで、1Qから、白のビッグマンに対する赤のイリーガルなコンタクトには笛を入れてきていたので、逆に白がイリーガルなことをした時には逃さずコールをするなど、気持ちの面でももっと準備はできたと思う。また、チームの特徴をもっと具体的に理解した上で、プレーに備えることだ。白はビッグマン、赤はドライブからキックアウトなど、大まかな捉え方からもう一歩進んで、『ビッグマンがどのようにプレーに関わってくるのか?』という捉え方をするすることで、プレーの予測がより明確になり、いい準備につながるのではないかと考えた。

## 6 所 見

ブロック派遣の中で、今回初めて全ての試合でCCを担当させていただきました。その中で、今年度は『気づきとアプローチ』というテーマからスタートし、初めて組むクルーとも、連携を図りながら必要な場面では飛び込むなど、様々なことに気づいて、自分からアプローチしていくことを心掛けてきたので、その部分については今回の派遣でも一定の成果を得られたと思っています。

年度途中で『リーガル or イリーガル』という壁にぶつかり、先日のWCにて新たに『ゲームフロー』という壁にぶつかり、今シーズンもいよいよ終わろうとしています。今回の決勝戦でも、自分が感じていたゲームフローが映像とは違っていたことがわかったので、来年度はその部分をつきつめていけるようになりたいと思いました。

大分県の皆様におかれましては、お忙しい中に、控え室での心配りや和やかな雰囲気での大会運営など、大変お世話になりました。他県の方々も、プレカンや振り返りに熱心に取り組まれていて、本県においても今後もこのような学ぶ姿勢は大事にしていきたいと感じました。

最後になりますが、本大会への派遣をご快諾いただいた原田審判長はじめ県協会の皆様に感謝申し上げ、派遣のご報告といたします。ありがとうございました。